

【生活的概念（ヴィゴツキー）】 第16回

ヴィゴツキーは、〈生活的概念〉と〈科学的概念〉を区別しました。これがセガンの〈概念〉と〈観念〉の区別とどう対応するかは問題ですが、両者とも、生活と科学、自我と社会の区別とゆるやかに対応し、教師が〈教えたこと〉を考えると、教師は、子どもが「すでに持っている概念は何か」を考える視点を持つことを要請しています。〈生活的概念〉を「自発的概念」と呼んでいるところにもそれはあらわれています。

子どもの持つっている生活的概念という土壌に、言葉という普遍がまかれ、土から栄養を吸収するとともに、土を「地下茎」に変え、もって大きな体系の木が育つという複雑なイメージでしょうか。生活的概念が科学的概念になるのではないのです。

柴田義松は、この問題が軽視されたまま、ヴィゴツキーの主張が「学びの社会的構成」、「社会構



成主義」の協同学習だと一面的に理解されていることを批判しています。中村和夫は、教育と発達のどちらが先かというような浅い問題把握にとどまり、「科学的概念体系の教授とその習得下における、子どもの高次心理機能の内的発達過程の解明」は大きな課題として残されていると指摘します。

今、〈授業〉ないし〈学び〉とは何かを深くとらえ直すために、生活的概念と科学的概念の区別、そして両者の関係を考えること、つまりは『思考と言語』の特に第6章をじっくり検討することが大事なときだと考えられます。（研究部・加藤聡一）

参考文献

- ① ヴィゴツキー（柴田義松訳）『新訳版・思考と言語』新読書社、二〇〇一年、原著一九五六年。
- ② 柴田義松『ヴィゴツキー入門』寺子屋新書、子どもの未来社、二〇〇六年、一二四ページ。
- ③ 中村和夫『ヴィゴツキーの発達論 文化・歴史的理論の形成と展開』東京大学出版会、一九九八年、一七七ページ。